

---

# 夜想曲

楠 海

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜想曲

### 【Nコード】

N6472Y

### 【作者名】

楠海

### 【あらすじ】

湖の底で貴方をずっと待っていた

笛の音が冴え渡る。

どこまでも見透かせそうな限りなく透明に近い水を微かに振動させ、四方の岸まで伝わっていく。きっとその震えは水面を僅かに波打たせることだろう。

水草が揺れている。その中に埋もれるように女は水底に座り、冷たく青く染まった唇を笛にあてがい、息を吹き込む。

旋律は定めない。水草の揺れる拍子、微風が水面で奏でる歌、魚の尾びれがそれらを遊ばせる。それらを掬い取る。夢見がちな、けれど悲しげな色を滲ませて儂い音色。

遙か彼方の水面から月光が沈んでくる。そうして砂地に躍る。その光が何か大きなものに遮られ束の間辺りは暗くなる。押しのけられた水の動きに、ほとんど静止してたゆたっていた女の長い黒髪が揺らぐ。

笛から唇を離すことなく頭上を仰いだ女の視線を受けながら、一頭の龍が水底に降り立った。巻き上げられた砂が刹那水を濁らせ、月光に煌きながらまた元いた場所に戻っていく。

『今夜は来るだろう』

龍の発した重低音を嫌ってか、女の周囲で泳いでいた数匹の魚は流線型の体を翻し姿を消した。それを気にした様子もなく笛から唇を離した女は微笑する。

「そうか」

答えながら、この龍の大きな瞳の色は何の色だったろうとふと考える。金と呼ぶには淡く、月光と言うには温かい。

『空で待つか』

「いや……もう少し、ここにしよう」

再び、笛を吹く。

高く低く唸らせると、薄氷を切り出したような龍の鱗の一枚一枚が

共鳴して澄んだ音を立てる。鱗が震える感覚が気に入っているのかいないのか龍は長い髭をそよがせる。その爬虫類然とした面に表情は認められないが、ふと碧の眼を上げて彼を見た女は薄く笑う。けれど何も言わない。笛の音がうねる。

周囲を山に囲まれ、流れ込む川もないこの湖に人はまず来ない。来るとすれば鳥獣、神霊、名もなきもの。女はいつの間にかここにいた者、龍はかつてここに生み落とされ、旅立たなかった者。

しかし時折、客人がここまで足を延ばすこともある。

女はそれを心待ちにしている。

それは本当に稀なことで、兆しが見えてもここに着く前に帰ってしまふ時もあり、だからこそ直前まで待とうとするが大抵待ち切れずに彼女は迎えに出る。

ふと、女が立ち上がった。

「……そろそろ出るか」

そのいつも通り淡白な物言いの裏にそわそわとした空気を感じ取り、龍は軽く鼻を鳴らした。頭を女の前に差し出しながら低く笑って言う。

『やはり待ち切れぬのではないか』

「客人は、こちらから出迎えなければ」

努めて無表情に答え、女は龍の頭に生える鹿のものに似た角を掴んで首にまたがる。それを確かめた龍は長い体をたわめて水底を蹴り水中を翔け上がった。

水音も立てず水と空気の境界面を破る。翠色の鬣から水滴が飛び散って無数の波紋を湖面に描く。

ああ、と月を見上げた女は呟いた。

彼の瞳の色は、月光ではなく月そのものの色であったか。

そして湖の上をゆったりと旋回する龍の上から山々の向こうを見つめる。

湖を取り囲む山々の頂上付近まで、濃い霧が溜まっていた。見渡す限り、地上は分厚く白く覆われている。例外がこの湖だ。それも今

にも、山々の縁から霧が零れ落ちようとしている。

霧を運ぶ風に微かに混じるのは塩気。

海霧が、内陸のこの湖まで押し寄せているのだ。

「……今夜こそは、」

背中で聞こえた独白に龍は応えない。それは彼女自身の独白である以上に、彼に向けられたものではない。

「今夜こそは来てくれるだろうか」

ぎりぎりのところで波打っている霧の邪魔をしないよう、龍はより高く舞い上がる。風が吹けば終わりだ。押し戻された霧はきつと戻って来ない。そしてそれは彼女が望むことではない。

息を殺して見つめていると、霧の先端が山の稜線を越えた。

それを皮切りに、決壊した一点から霧が湖を目指して滑り込んだ。

月光に照らされて青白い光を帯びたその流れは滝のようにも見える。ひどく緩慢な動きでありながら着実に降りてくる霧を見て、女は龍の角を知らず知らず握り締める。もう少し、あと少しで霧の指が湖面に触れる

そして滝は湖面に降り注いだ。

純白の瀑布の中に一人の男が立っていた。

龍は身を翻し男の目の前に急降下する。霧を散らし湖面にさざ波を立てて低空に静止し、大きな頭を水面付近まで下げる。龍の首から滑り降りた女はその素足が湖面に触れる前に男に抱き止められた。

はずみで男の足元から、女の爪先がかすめた一点からささやかな波紋が広がる。

白い頬を仄かに紅潮させ何事か言いかけた女の青く染まった唇に、柔らかく微笑んだ男は接吻した。女の手はまだ握られたままだった。笛が滑り落ちかけ、男は女の指ごとそれを掴む。

無事にめぐり会えた二人の様子を視界の端に捉え、龍は夜空に翔け上がった。無粋な真似などしようはずもない。

月が傾き東の空が白む頃、龍は湖に帰り二人は名残を惜しむ。そして日の最初の光が湖に差し込んだ瞬間、全ては掻き消える。

逢瀬は短いものと決まっているのだ。

日に照らされ、霧の残滓を纏わりつかせながらも深く青い姿を見せた湖は、夜の間のみ儚い夢幻の欠片を懷に抱く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6472y/>

---

夜想曲

2011年11月20日00時09分発行